

令和2年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団	
施 設 名	ロームシアター京都	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業	
内 定 額 (総 額)	28,930	(千円)
	公 演 事 業	22,021 (千円)
	人 材 養 成 事 業	6,909 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	0 (千円)

(1) 令和2年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	地点『君の庭』	2020年9月14日～22日	作：松原俊太郎、演出：三浦基 出演：安部聡子、石田大、小河原康二、窪田史恵、小林洋平、田中祐気	目標値	910
		ノースホール		実績値	520
2	ロームシアター京都 レパートリー作品 木ノ下歌舞伎『糸井版 摂州合邦辻』	2020年11月2日、3日	監修・補綴・上演台本：木ノ下裕一 上演台本・演出・音楽：糸井幸之介 (FUKAIPRODUCE 羽衣)	目標値	860
		サウスホール		実績値	530
3	名和晃平×ダミアン・ジャレ『Planet』	2020年11月18日、19日 (中止) ※	新型コロナウイルス感染症の影響により中止。	目標値	1,100
		サウスホール		実績値	—※
4	フランソワ・シェニョー&ニノ・レネ『不確かなロマンス -もう一人のオーランドー』	2020年12月21日※	ダンス・歌唱：フランソワ・シェニョー コンセプト・音楽監督・演出：ニノ・レネ	目標値	860
		サウスホール		実績値	386※
5	ハンブルク・バレエ団 ベートーヴェン・プロジェクト	2021年3月28日 (中止) ※	新型コロナウイルス感染症の影響により中止。	目標値	1,500
		メインホール		実績値	—※
6	アセンブリープログラム ホリデー・パフォーマンス	2020年9月6日 他	Vol.5：おおしまたくろう Vol.6：アキビジオオーケストラ Vol.7：正直	目標値	800
		3階共通ロビー 他		実績値	318※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和2年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	劇場の学校プロジェクト	2020年7月～8月	講師：岡田利規、木田真理子、石橋義正、伊藤隆之、中島那奈子、吉岡洋、松田正隆	目標値	210
		サウスホール 他		実績値	109※
2	リサーチプログラム	2020年7月～ 2021年3月	リサーチャー：和田真生、小山文加、渡辺健一郎、朴建雄、松尾加奈、島貴泰介	目標値	108
		会議室 他		実績値	31※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和2年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

当劇場は、文化芸術の創造・発信拠点として、京都における文化芸術のインフラ構築のためのハブ機能を果たしていくとともに、「劇場のある空間」を中心に、人々の暮らしの感覚と芸術とが相互に繋がることで、京都に「劇場文化」をつくり、根づかせることを社会的役割（ミッション）としている。このミッション実現のためには、市内はもちろんのこと、国内外のネットワークを活かし、「地域の人々に、世界水準において質の高い作品鑑賞の機会を定期的に提供すること」と「次世代の人材を発掘し育てること」が重要だと考えている。本助成対象事業は、まさにこの根幹をなすものである。特に、現在の京都において、一定規模以上の現代的なプログラムを上演できる劇場は限られており、広域的に西日本地域にとっても貴重な場となっている。また、舞台芸術の入り口となるホール外でのプログラムを実施し、地域の人々と劇場の新しい接続を試みている。人材養成事業については、研究・批評と実践の場をつなぐ専門的人材を対象としたものに加えて、13歳～18歳の若年層を対象とした事業に力を入れている。人材養成事業の核ができたことで、公演事業と人材養成事業のバランスが図られ、ミッション実現に向けての事業構成がより整ってきている。

新型コロナウイルスの影響により、海外からの2演目が中止になり、なんとか来日を果たした公演も隔離期間を確保するために公演回数を減らした。観客数や参加数に関しては、全事業目標に達しなかった。これは、ガイドラインに沿った席数の規制や広報を控えざるを得なかったことが要因である。予定通りに進められなかったこれらについては、本年度は致し方なかったと判断している。

中止となったハンブルク・バレエ団公演では映像上映を行い、地点『君の庭』はオンライン版も制作した。ただ単に事業を中止・縮小するのではなく、新たな試みに挑戦でき、ノウハウを積んだ。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

ロームシアター京都の指定管理者選定における仕様書（平成30年度公募）のなかには、他の運営方針と共に、「質の高い舞台芸術や新たな文化創造の場として世界文化都市・京都を発信する“文化の殿堂”」と記されている。具体的には、①自ら企画・制作した作品、②外部の文化芸術団体等と協同し制作した作品の上演、③芸術性の高い舞台芸術作品の招聘、④鑑賞者、制作者、舞台技術者等の育成を目指した事業を挙げている。本助成対象事業は、この①～④の要素を含むものであり、設置者である京都市からの要望及び期待に沿うものである。

オリジナリティのある文化施設が立地し、すでに多くの実演家、アーティストが京都を拠点に活動している。そこに当劇場が加わることによって、これまでの京都に機能として欠けていた総合舞台芸術に対応可能なメインホールをはじめ、3ホールを有する劇場に対するニーズ、期待は大きい。特に、中規模以上の舞台作品の鑑賞機会への希求は高い。今後も継続して、一定規模以上の質の高い舞台作品を定期的に上演することが地域のニーズに応え、地域の人々の鑑賞機会及び文化芸術活動の拡大に資すると考えている。

木ノ下歌舞伎公演では、音声や字幕ガイド、送迎サービスといったアクセス支援を行い、障害のある方が劇場に来る回路を生み出した。実施後、利用者とフィードバックを行い、課題を抽出するなど関係協会等との繋がりが深まった。青少年の育成を目的とした劇場の学校プロジェクトでは、教育委員会の後援、教育機関との連携を図り、事業の定着及び認知度の向上を図った。これまで京都になかった規模の劇場が稼働することにより、地域の舞台芸術関係者の雇用を生み出し、活性化を促している。事業を通して、海外からの観客やアーティストを迎え入れ、地域の人々と世界の出会い、国際交流の場を生み出している。これらの事象、状況を鑑みて、文化的、社会的、経済的意義を継続して認めることができると考えている。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

●【公演事業】目標は以下の5項目とした。(無料公演は⑤以外を設定)

①国際水準の質の高い公演を紹介し、観客に新たな発見や刺激を与え、舞台芸術への関心を喚起させる。②アーティストが最適な環境でリハーサル・本番を迎えられるようにし、ベストな舞台鑑賞環境を観客に提供するように努める。③公演だけでなく、トークや広報媒体等で、コンセプトや作品の背景が観客に伝わるようにし、より深い鑑賞を体感してもらう。④ある一定の層だけでなく、幅広い興味から来場を促す広報活動を展開し、多くの観客に足を運んでもらう。⑤ユース料金(25歳以下)を設定し、次世代の観客の掘り起こしを行う。

目標①③については、観客アンケートに満足度及び舞台芸術への関心を測る項目を入れ集計。地点『君の庭』66%、木ノ下歌舞伎94%、フランソワ・シェニョー&ニノ・レネ86%。概ね観客の満足度は高かった。目標②については、アーティスト共に感染予防対策を試行錯誤しながら事業を進めたこともあり、劇場に対する感謝の声が大きく、課題については特段出てこなかった。観客アンケートからは、感染症予防の対策についての意見がいくつか挙がった。目標④については、アンケートに任意で観客の属性や関心を記入してもらった。身体表現以外のジャンルからの誘客は、映画や美術に興味がある人が多く、舞台芸術の分野でも現代音楽の数値が高かった。集客に関しては、収容人数の規制があったため、達成を測ることは難しい。ガイドラインに従った設定客数では、80%を超えた。目標⑤については、ユースチケットの購入者数で測った。地点『君の庭』17%、木ノ下歌舞伎14%、フランソワ・シェニョー&ニノ・レネ15%となった。20パーセントを指標としており、若年層の呼び込みは課題が残る。ホリデー・パフォーマンスについては、オープンスペースでの不特定多数に対するパフォーマンスだったため、ガイドライン上、アンケートを配布することができず、ウェブアンケートも集まりが悪く、指標をする数字を集めることができなかった。

●【人材養成事業】目標は、対象が大きく異なるため、事業別に設定した。

「劇場の学校プロジェクト」①舞台芸術を通じて青少年の育成を行い、社会の未来に寄与する。②これまで舞台芸術に関心を持っていなかった青少年の関心を本プログラムに集め、潜在的な人材の発掘を行う。③舞台芸術教育についての課題と展望を多くの人々と共有し、舞台芸術の社会における意義を高める。

①アンケートでは、「想像する力」や「他者とのコミュニケーション力」が伸びたと自己評価する参加者が多く、ここでの経験が何らかの形で彼女らの人材育成に寄与していると考えられる。②応募者数のべ81名。演劇コースでは約70%、メディア・パフォーマンスコースでは約30%が未経験の参加者。舞踊コースは参加者全員が舞踊経験者。目標②の関心を持つ層を広げるという観点では、課題が残る。特に舞踊コースでは、従来のお稽古事以外からの関心を持つ参加者を増やす方法について検討を要する。③記録兼報告者によるアンケートやヒアリング、その後の分析をまとめた報告書を発行する。

「リサーチプログラム」①舞台芸術に関わる研究・批評分野と実践の場をつなげる若手人材の育成を行い、劇場のプログラムをより充実したものとする。②舞台芸術に関わる研究者の関心を、本プログラムに集め、潜在的な人材の発掘を行う。③本事業の成果を様々な形でアウトプットする。④専門家の寄稿と共に、劇場発行の機関誌や報告書にリサーチャーの調査結果を掲載する。専門家から一般の人々まで、舞台芸術への興味を促すものとし、他の公立文化施設にも参考になるものとする。⑤最終報告会を実施し、多くの参加者を集める。

①過去のリサーチャーがロームシアター京都のプログラムに記録者として参画、企画提案や意見交換も行っている。この関係を維持し、お互いの協力によって、劇場のプログラムの充実に繋げる。②応募者数は17名で指標を達成した。③④報告書、機関誌は100箇所以上に配布及び配架し、様々な反響を得た。⑤参加者は25人に留まったが、映像配信を行い、現地まで来れない人たちにもこのプログラム、そしてここでの知見を共有できた。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

●事業期間について

・地点 『君の庭』

計画：令和2年9月18日（金）～22日（火・祝）⇒実施：令和2年9月14日（月）～22日（火・祝）

感染予防対策のため、一回の収容人数を減らし、公演回数を増やしたため、実施期間が延びた。

・ロームシアター京都 レパートリー作品 木ノ下歌舞伎 『糸井版 摂州合邦辻』

令和2年11月2日（月）、3日（火・祝） 計画より変更なし。

・フランソワ・シェニョー&ニノ・レネ 『不確かなロマンス -もう一人のオーランド-』

計画：令和2年12月5日（土）、6日（日）⇒実施：令和2年12月21日（月）

海外からのアーティストには隔離期間が設定されたため、実施期間、回数の変更を余儀なくされた。

・アセンブリープログラム ホリデー・パフォーマンス

計画：①令和2年9月上旬、②令和2年10月下旬、③令和3年2月下旬⇒実施：令和2年9月6日、令和3年2月20日、3月21日

感染状況に配慮しながら、実施時期を再設定した。オープンスペースでの実施のため、ガイドラインの適用が困難で年度後半での実施となった。

・劇場の学校プロジェクト及びリサーチプログラム 計画に沿った期間で実施。

新型コロナウイルス感染予防対策のため、いくつか変更が生じたが、その時その時の状況に応じて判断し、最適な選択ができたと考える。ただ、公演実施可否が不安定なこともあり、チケット販売期間が短くなり、広報手段には悩まされた。効率性については高く評価することはできないが、数年後、十数年後の未来への投資と認識している。

●事業費について

フランソワ・シェニョー&ニノ・レネ公演では、来日したアーティスト、スタッフを14日間隔離したため、予定していなかった経費が発生した。結果として、公演回数が減ったこと、他公共劇場と共同招聘することにより経費を按分することができたので、大幅な変更にはならなかった。アセンブリープログラム ホリデー・パフォーマンス、劇場の学校プロジェクトでは、支出が大幅に減少した。これも、新型コロナウイルスの影響で事業規模を縮小せざるを得ず、広報も控えめなものとなったためである。また、全体的に当初案から入場料や参加料収入は減額となった。

人材養成事業に関しては、計画段階よりも支出は抑えられたが、事業の対象者数で考えるとしっかりと経費をかけた内容を実施している。当劇場では、一般的な費用対効果の考え方より長期的なスパンで効果測定をすべきだと考えている。このことに関して、社会的コンセンサスをとる努力を引き続き行っていく。

本年度は、とにかく「公演を実施すること」に努力してきたが、今後、課題と考えられるのは、入場者数である。日本初演や上演直前まで完成形を見ることができない新作公演は、入場者数や入場料収入についてはリスクの大きい公演である。広報や営業手段など改善していく余地は大いにあるが、効率性や経済性の指標で図りきれない部分で優先するものもあると考えており、全体の事業バランスを図っていきたい。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当劇場は、公共劇場やフェスティバルでの従事経験のある専門の人材を開館準備から擁してきた。さらに、他劇場・フェスティバルの芸術監督やスタッフ、アーティストと将来的な展開について意見を交わすことで劇場間交流が促進され、我々の技術・制作スタッフにとって、様々なノウハウを蓄積することができている。また、京都市交響楽団の第2フランチャイズ劇場としての機能を果たしているほか、新国立劇場との連携・協力に関する協定書の締結を行うなど、各所との連携を強めている。本年度は、新型コロナウイルス感染症対策にあたって、他地域の公共劇場とのネットワークが活かされた。特に、フランソワ・シェニヨールの公演は、全国的に見ても令和2年度の貴重な海外アーティストによる公演となり、久々の機会を楽しむ観客の様子が見られた。本年度の事業実施は、アーティスト、劇場、そして観客、その場にいる全ての人の努力と協力で成り立つものだったと言える。また、ロームシアター京都において求める館長の在り方等について、外部有識者を招いて協議・検討し、「ロームシアター京都館長問題に係る信頼回復の取組について」を発表（令和2年12月）し、地域の文化拠点としての機能に必要な人材について、時間をかけて考えることとなった。

地点の公演においては、リアルとオンラインの両方を行うハイブリッド型公演の先駆けとなった。舞台芸術の映像での発信について、試行錯誤が始まっていたが、意欲的な試みにチャレンジすることができた。終演後のポストパフォーマンストークでは、本作のテーマ「天皇制」について、いろいろな角度から意見交換ができ、有意義な時間となった。

木ノ下歌舞伎の公演は、再演ではあったが、キャストの変更、一部シーンの追加などがあり、初演を上回る評価を得た。初演時では伝わりにくかったところに、情報を付け加えるなどし、上演を重ねるごとに作品が進化・深化する理想の形となった。とりわけ日本の演劇界においては、新作がもてはやされる傾向があるが、作品を育てていく、再演の取り組みにも注目を集めることができた。

フランソワ・シェニヨールの公演は、舞踊／音楽／歴史／芸術／社会と様々な視点を持つ舞台であり、企画段階でも普段劇場に足を運ぶことのない観客の観劇創出を狙っていたが、さらに海外からの招聘公演が困難な時期に世界レベルの舞台芸術を上演できたことで、従来の観客のみならず、始めて劇場へ訪れる観客層も劇場へ足を運ぶ機会となり、舞台芸術の可能性と公共劇場の存在意義を伝えることができた。歴史とジェンダーという地域性と同時代性のあるテーマの作品を上演することにより、舞台芸術を入り口とした思考を促す機会を作ることができた。

ロームシアター京都は、ホール以外のオープンスペースを大きくとり、誰もが立ち寄れる空間を有しており、その特長を存分に活かした「アセンブリープログラム ホリデー・パフォーマンス」を実施した。

人材養成事業「劇場の学校プロジェクト」は、まさに現在の舞台芸術の最前線に立つアーティストを講師に迎えていることが一番の特徴である。若年層とアーティストの出会いは、今後のロームシアター京都の豊かな未来になると考えている。

「リサーチプログラム」は、コロナ禍のため、実地でのリサーチが難しいところもあったが、6人のリサーチャーは工夫して調査研究を進め、最終報告会に臨んだ。それぞれの調査は、劇場の財産となるものであり、今後の自主事業運営に大いに活かされるものである。

映像配信の機会増加に伴い、インターネット回線の整備を行い、創造活動の充実のための設備導入を図った。

また、「ロームシアター京都における新型コロナウイルス感染症拡大予防ガイドライン」（令和2年7月策定、同年9月、10月改訂）と「ハラスメント防止ガイドライン～ロームシアター京都で過ごす全ての人のために～」案（令和3年2月）を発表し、舞台芸術の上演・創造環境の安全確保のための取組を推進した。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

平成 30 年秋に次期指定管理者の候補となる団体の選定が行われた。選定委員会においては、2016 年の開館からの運営状況について、高い稼働率の維持・安定的な運営等の理由から、地域の実演芸術・文化芸術の振興拠点として高評価を得た。今後の運営に関する提案内容についても、文化芸術の振興に大いに資するものとして期待されており、今回の選定では、京都市では例のない 8 年という長い指定期間が設定された。

事業や施設に関する要望や提案を集めるために、①自主事業の入場者、②施設利用者（主催者）、③窓口来訪者を対象とする定期的なアンケート調査の実施や、レセプションистやチケットカウンターの職員が利用者の声や気づきを共有する仕組の拡充に努めている。これらの取り組みで得られた声からは、当館への高い満足度がうかがえる。

さらに、劇場自主事業の支援のためのサポーター・パートナー制度や劇場の会員制度を確立し、月 1 回発行の通信の送付、会員向けイベントの開催（劇場ツアーやリハーサル見学会、アーティスト・スタッフとの懇談会）等でコミュニケーションを図っている。多くの会員数を擁し、年間 600 万円超の寄付金を頂けていることは、事業への評価が地域からの支援という形でも表れているものと捉えている。

広報については、知名度の向上やチケット販売枚数の増加を目的とするだけでなく、当館が生み出す価値を直接的な受益者以外にも理解していただき、市民とのコミュニケーションを深めるものと考えている。例えば、年 2 回発行の機関誌『ASSEMBLY』では自主事業の紹介に留まらない、広い視点から舞台芸術の面白さ、深さを伝える内容を掲載し、文化芸術の発展に繋がるよう取り組んでいる。平成 30 年度に劇場のウェブサイトを全面的にリニューアルし、施設概要や公演情報の掲載はもちろん、より手軽なチケット購入を可能にし、他劇場の情報掲載も行うなど、利用者の利便性向上を図った。また、SNS への投稿、広告出稿を積極的かつ戦略的に行い、外部委託をして分析を行った結果、ある一定以上の効果が抽出された。

当財団が実施したインターネット調査の結果では、対象者の 78.4%が「京都にロームシアター京都があることに対して、愛着あるいは誇りがある」と答えている。（令和 3 年 3 月実施調査）他の比較データがないため、分析が難しいところはあるが、我々としては、高い期待と注目を感じている。開館 5 周年を経たが、地域のニーズをまだはっきりと掴めていないことをひとつの課題として認識しており、今後、人々との関わりを増やしていくことにより、地域に必要な劇場の役割を担っていく。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

ロームシアター京都を運営する、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団は、「中期経営計画 2021」（平成 30 年 3 月発行）を策定し、2018 年度から 2021 年度までの 4 年間の方針、それぞれの主要成果指標を定めている。

京都市の文化芸術のインフラの経営を総合的かつ安定的に展開し、経営基盤を強化するため、組織運営に関して「自立的・安定的な組織運営力の向上」「働き方改革等への対応」「組織人員体制・配置等の最適化」「危機管理体制の確立・運用」の 4 つの重点取組事項を推進している。財務運営に関しては、「中期的な収支の見通しに基づく財務戦略の構築・運用」「財団全体・各部門の財務管理の強化」「戦略的・計画的な投資等の推進」「ファンドレイジングの推進」を重点取組としている。

P D C A の流れは、理事会を中期経営計画及び年度事業計画の承認・評価の最高機関として、計画の進捗確認・年度評価及び事業計画の作成・進捗確認・年度総括、各事業の実績報告・事業評価は各部門の責任者で構成する月例会を行っている。2022 年度以降も、現在のを発展させた次期中期経営計画を策定予定である。

この計画の各部門の方針のもと、設置者である京都市からの指定管理料、各所からの助成金、協賛金、寄付会員からの支援を得、持続的に発展することができる組織運営を行っている。

なお、平成 30 年 10 月に結果が発表された指定管理者選定において、「長期的な視点で指定管理者の果たすべき役割をしっかりと認識した具体的な提案内容」と高評価を得、平成 31 年 4 月から令和 9 年 3 月末までの 8 年間に及ぶ指定管理者に選定されている。

また、公益社団法人全国公立文化施設協会や公共劇場舞台技術者連絡会、劇場、音楽堂等連絡協議会（劇音協）への参画、各事業を通じた取組により、他地域の劇場・音楽堂や教育機関等関連団体との関係が強化されている。地元アーティストや近隣文化施設と共に地域活性に資する事業を行うと同時に、海外招聘公演を積極的に行い、そのネットワークはローカルにも、グローバルにも広がっている。令和 2 年度は、国内の公共劇場との協働が多く、ネットワークが強化された。このネットワークにより、新型コロナウイルス感染予防対応についても、情報交換をスムーズに行え、大いに活用できた。